財団法人新住宅普及会
住宅建築研究所報1977

# 都市集住様式の歴史的研究　そのⅣ
# 近世町屋の実態調査

## ―筑波の場合―

石井　昭　羽生修二　満山善之
一色史彦　星　和彦　荒牧澄多
南　直行　弭間正明
石井邦彦　山田幸正　前沢奈緒子
吉沢政己　及川正二

## 1　調査の概要

### 1―1　調査の目的

わが国の住宅研究の全体的に層が薄いことは，すでに指摘されているところである。

そのなかでもとくに武士住宅および町屋の研究が遅れている。

近世社会における役割りからみても現在の住宅研究が農家の方に偏しているというべきだろう。

民俗学の実体は，農村民俗学であって，都市生活を対象とするところきわめて少ないのが現状である。

われわれは，前回の調査において，萩の武士住宅を扱かった。全国的に類例のないほど，多数の中小武士住宅の残存がみられる萩は，その方面での研究対象として，価値の高い場所であった。

その一方で，調査の余力を萩の町屋にも向けたが，町屋についてはまだまだ全国的に残存例が多く，比較検討の余地が残されている。

関西の町屋形式と関東のそれとの類似点あるいは，異質な点を明らかにしたい，という方向にわれわれの関心は移ったのである。

関東では，埼玉県の川越の土蔵造町屋がとくに著名であり，その調査もすでに行なわれている。それは，おおむね明治に形成された景観である。

江戸時代末期から明治中期に至る時期には，川越のみならず関東一円に同様の土蔵造建設ブームとでもいうべき傾向が認められる。そうしたひろがりを明らかにしたいというのも，われわれの目的のひとつである。

もうひとつの目的は，明治前期における前期資本主義経済の波をかぶった結果，住宅が遂げた変容過程の検証にある。

今回の調査地・筑波はそうしたわれわれの目的に沿う性格を兼ね備えている。歴史的な変化は次章に示したごとく，まことに起伏に富んだものであり，その複雑な性格は現在の集落景観に色濃く残っているのである。

調査対象に選定した4地区もまたその形成の歴史を異にし，それは住宅形式の差となって示される。純粋な商業住宅・農業住宅そしてその中間的な住宅といった対比もまた興味深いものがあった。

### 1―2　調査の内容

**調査地区・家屋の設定**

今回の調査にあたって，まず筑波町の町並の概要を把握するために，小田・北条・神郡・東山・上大島の各地区の予備調査を行なった。その結果，北条の仲町・内町，神郡，東山，上大島の4地区を対象地区とし，21軒の対象家屋を選定した。対象家屋を選定するにあたっては，各地区を代表するもの，編年変化を迫えるものという基準を設けた。

**調査の経過**

a．予備調査

各地区の町並の写真撮影，外観形式分布地図作成，外観分類調査表作成を行なった。また聞き取りによって建築年代を調査し，本調査対象家屋を選定する参考にした。

77．5．2～6．29　の期間に延べ5日間の調査を行なった。各回の調査内容は次の通りである。

第1回（77．5．2）筑波町教育委員会訪問，筑波山神社訪問。北条・小田の写真撮影および外観調査。参加者8人。

第2回（77．6．1）筑波町教育委員会訪問。神郡・北条の写真撮影および外観分類調査。参加者3人。

第3回（77．6．11）上大島・北条の写真撮影および外観分類調査。参加者3人。

第4回（77．6．25）小田・東山の写真撮影および外観分類調査。北条の年代聞き取り調査。参加者4人。

第5回（77．6．29）調査家屋選定。

b．本　調　査

77．7，11～7．18の8日間。参加者延べ104人。

北条・神郡・東山・上大島の家屋の屋根葺材，屋根の形状を悉皆調査した。

調査対象家屋については，平面図・立面図・断面図・配置図等の図面採集，写真撮影，聞き取りを行なった。

## 2　つくばの町並

### 2―1　北　条

**歴　史**

北条は周辺に古墳群・廃寺跡・郡衙跡・条里制遺構な

どがあり，早くから開けていた。北条という地名も条里制の北に位置することから来ている。また北条は，古代より筑波山の表登山口として繁栄してきた。

中世には，平維朝が北条の多気の地に城を構え，大掾氏を名のった。大掾氏は六代目多気太郎大掾義朝の代まで続いた。大掾氏が亡んだあと，八田知家の七子時家は，北条の中台・古城に城を築き，北条七郎と称した。その後天正10年（1582），下妻城主多賀谷政経によって，この地は攻め陥された。

近世になると，水戸より瀬戸井（群馬県）に至る瀬戸井街道や，土浦から下館・真壁・下妻の三方面に至る街道の宿場町としても発展していった。近世初頭には，まだ田中・筑波・小田・北条などでは定期市が開かれていたが，綿・大豆・米などの商いにより，しだいに北条商人が力をつけてくるようになり，定期市は次々と姿を消していった。

明治時代に入ると，商人たちは米・繭を中心に商い富を集積し，それを土地に投下し，寄生地主としての役割を持つようになった。大正7年に筑波鉄道が開通してからは，筑波駅が筑波山への表玄関となり，北条の登山口としての機能は失われていった。しかし，現在でも町役場・警察署などの行政機能は依然として北条にあり，商業活動も比較的活発である。

**町並の外観**

北条は街道沿いに土浦寄りから，新町・中町・内町とわかれ，江戸時代にはそれぞれに陣屋がおかれていた。（今回の調査では，中町，内町を対象として取り上げている。）

新町から中町へむかう道は，八坂神社のところでクランク状に折れ曲がり，桝形をなしている。その道が折れたところに，甲造茅葺の町家，松本金吾氏宅（調査番号①）がある。この家が北条の町家では最も古く，おそらく180年以上はたっているであろう。そこから西には，道路に沿って左右に伝統的な土蔵造（21棟）や，木造せがい造瓦葺の町家が続く。

しばらく歩くと，左手に土蔵造のファサードがよく保存された宮本昇一氏宅（調査番号②）がある。ここが中町のはじめで，それより手前は明治までは空地になっていた。そこから少し先に行くと，右手に折れる道がある。この道は筑波山への旧道であり，神郡ー臼井ー筑波へと続く。また，分岐点には正徳5年創建，寛政10年再建の道標が立っている。この旧道に沿っても，土蔵造や木造せがい造瓦葺の町家が並び，横町と呼ばれる地区を形成している。

道標を過ぎると，右手に市神がある。市神は定期市が開かれていた当時の守り神で，小さな石造・一間社流造の祠である。道路を隔てて市神の向かい側には，土蔵造で寄棟妻入の沢辺ヤス氏宅（調査番号③）があり，宮本宣一氏宅，宮本要氏宅（調査番号④）と土蔵造が続いていく。この先道路右手には二階が二つ並ぶ変わった外観の田村積子氏宅（調査番号⑤），井上和男氏宅，井上研三氏宅と土蔵造の町家が続く。再び左手に目を向けると，並び蔵形式土蔵造の井上善兵衛商店がある。その先の川田廉平氏宅（調査番号⑥）は，昭和30年に北条の標準家屋に指定されたもので，木造二階建せがい造の建物である。さらに土蔵造の若松ラジオ店，せがい造木造二階建・土蔵造・木造二階建と三棟並ぶ宮本常次郎氏宅（調査番号⑦）が続く。

しばらく行くと，土蔵造で，もとは袖蔵がついていたという大塚総一郎商店がある。その先に土蔵造の町家が二棟あるが，そこで一応伝統的な町並はとぎれ，道路の右手には警察署，左手には役場と近代的な建物がたつ。西に向かって更に歩いていくと，右手に長屋門が見える。山口好夫氏宅（調査番号⑧）である。長屋門奥の茅葺の主屋は，宝暦14年に建てられたものであり，もとは陣屋であった。山口氏宅をすぎて左手には，昭和初期に建てられた木造二階建せがい造の広瀬とし子氏宅（調査番号⑨）がある。以前の北条の町並はここで終わっていた。

中町・内町では江戸時代に町割が行なわれ，各々8間間口で区画された。山口好夫氏宅や，その東隣りの山口貞一氏宅は，16間間口で区画された。現在でも，当時のなごりの水溝が，北から南へ向かって家と家の間を流れている。この水溝は，両隣りの家が5寸づつあけて，あわせて1尺の幅に堀られていた。

北条の伝統的な町家は次の3種類に分けられる。木造茅葺甲造で低い二階を持ち，妻入りのもの（例，松本金吾氏宅・写真1）。第二に木造瓦葺で低い二階を持ち，軒裏・外壁を漆喰で塗籠め，二階に窓を開くもの。一階は全面開放で，戸袋だけ漆喰で塗籠め，火事の際には土戸を立込む（例　宮本昇一氏宅・写真2）。第三に木造瓦葺二階建で，二階屋根の軒を支えるせがいが特徴的なもの（例　宮本常次郎氏宅）。

次に時代を追って町家の特徴を見てみよう。江戸時代初期からかなり町並が整ってきた北条も，江戸時代中期まではまだ瓦葺の町家は見られず，茅葺の町家が並んでいた。後期に入り，文化文政期になってようやく瓦葺の町家が現われる。茅葺ではいったん火事が起きるとなすすべもなかった当時，防火対策上瓦葺土蔵造は有効であり，江戸を中心とした関東各地に広がっていった。しかしながら，土蔵造は極めてお金がかかるので，富裕な商人しか建てることができなかった。北条でも，商人たちが豊かになったのは，幕末から明治初期にかけてであり，この頃盛んに建てられるようになった。

北条の土蔵造町屋を詳しく見てみると，妻入りと平入りの二種に大別できる。妻入りの例としては，沢辺ヤス氏

宅があり，店と主屋に分かれず一棟である。北条では平入りが大部分で，調査対象地区21 棟中18 棟を占める。平入りの場合は，店と主屋がはっきり別棟に分かれ，主屋の方で火事が起こっても店蔵の方に火が燃え移らないように土壁と厚い土戸で主屋と仕切る。また，主屋の建て方は，店蔵と並列に並べる並び蔵形式のものと，店蔵と棟が直角になる形式のものとある。二階の窓形式も，観音開き戸と引戸の二種類に分かれる。以上の種々の形式の違いは，どちらが古いかは判断しかねる。

幕末から明治初期にかけて盛んであった土蔵造りブームも，中期頃には一段落し，明治後期には別形式の町屋が建てられるようになる。木造二階建せがい造の町屋である。別形式といっても伝統的形式で，関東ではよく見かけるものである。せがいをつければ土蔵造ほど金がかからず見ばえが良いということで，以後この形式は戦前まで続く。そして，明治・大正・昭和と時代と共に二階が高くなり，ガラスが用いられるようになる。

戦後になると，土蔵造と木造せがい造の町並も漸次変貌を遂げていく。古いファサードを隠す大きな看板が掛けられ，建て替えも行なわれていき，今日に至っている。

## 2－2 神　郡

### 歴　史

縄文・弥生・古墳時代を通じ，ここ神郡を含む北条・田井・臼井あたりは筑波国の政治・文化の中心であった。神郡は，古代から江戸・明治時代にかけて，筑波山に登る中継地になっていた。ここから臼井を経て筑波山へ至る路線と，蚕影山神社，六所神社へ参詣して六所から登る路線があった。特に後者は，蚕影山神社が養蚕の神様であり，江戸時代以後関東近辺から参詣者が集まってきた。江戸時代には，旗本井上家の所領であり，代官がこの地を治めていた。神郡は農業中心の集落であり，筑波山への行来が盛んであった時代には，道路に沿う家々は店を出していたが，大正7年に鉄道が開通して以後は，行きかう人も減り，静かな雰囲気の農村集落にかわっている。

### 町並の外観

北条から神郡へ入り，臼井へ向かう神郡のはずれに来ると，道は下り坂になり，正面に筑波山が見えてくる。この付近は往時の姿をよくとどめているところであり，道の両脇には土蔵の店や長屋門が筑波山を背景として，絵になる景観をつくり出している。

北条から来ると右手には，桜井義広氏宅（調査番号⑪）桜井武氏宅（調査番号⑫）がある。この2軒の配置はよく似ており，道路沿いに店蔵と薬医門がたち，店蔵に続いて南向きに主屋が立つ（写真9参照）。桜井義広氏宅には，薬医門をはさんで南北二つの店蔵がある。共に切妻瓦葺であるが，外観意匠は同一ではない。南側の店蔵は棟瓦が高い，軒に出桁を見せる，二階窓に引戸を用いる，一階には格子戸が入るといった特徴があるのに対し，北側の店蔵は棟瓦が低い，軒が塗籠められる，二階窓は開いているだけ，一階にはガラス戸が入るというふうに，意匠的にやや見劣りがする。

一方道路の左手に目を向けると，桜井昌之助氏宅長屋門（調査番号⑩），桜井晃氏宅の門・主屋，桜井正氏宅長屋門と，農家の景観を見せている。桜井昌之助氏宅の長屋門は瓦葺で，南側は切妻，北側は入母屋屋根になっている。それに対し，桜井正氏宅の長屋門は寄棟屋根で，現在は瓦葺きであるが，もとは茅葺だった。

神郡は農村集落の性格が強い街道集落であった。そのことがここの景観を大きく特徴づけている。つまり，主屋や長屋門は典型的な農家の形態をしているのに対し，道路沿いに街道を行き来する人のために店を構えるのは，町屋的といえる。

## 2－3 東　山

### 歴　史

東山は筑波山の中腹にある集落で，筑波山神社のすぐ東に位置する。北には，東の女体山，西の男体山の二峯が間近に望め，南には霞ケ浦をはじめ，関東平野が眼下に見おろせる地にある。

筑波嶺を外のみ見つつありかねて
　　雪消の道をなづみ来るかも（万葉集）

筑波嶺の峰より落つる男女川
　　恋ぞつもりてふちとなりぬる（陽成院）

筑波山は万葉の昔から歌に歌われるほど人々に親しまれ，夫婦和合の神としても信仰を集めてきた。水戸・石岡方面や，六所からの筑波山神社への参詣人，および筑波嶺への登山客がこの東山を通った。そのため街道沿いには，昔は宿屋であった家が多い。安明の末か天明の始め頃（約1780年頃）の大火で，この東山は全焼したと言われており，現在ある町並はそれ以後のものと思われる。

また元治元年（1864）には，水戸藩の天狗党首領藤田小四郎などが，この東山の旧家八木下信之氏宅に身を寄せ，尊皇攘夷の旗をかかげた。

大正7年の筑波鉄道開通，大正14年のケーブルカー運行と筑波山登山が便利になって日帰り客が多くなると，宿屋もしだいに灯が消え，東山は静かな農村集落となっていった。

### 町並の外観

東山の民家は茅葺で曲屋が多かった。「関東地方の民家」によれば，以前は戸数43戸のうち半数は曲屋であったという，1967年の小林昌人氏の調査時においても，曲屋は16棟あるが，現在では9棟のみである。茅葺は小屋も含めて現在27棟ある。

屋敷構えは，山の斜面にあるため，石を積み上げて敷地を造ることが多い。その敷地は狭く，屋敷林もあまりない。

筑波山神社から東へ小さな沢を越えると，東山の集落がある。東山へ入ると，すぐ道は二つに分かれる。左の道は筑波嶺への登山路であり，右の道は風返峠を越え十三塚を経て，石岡・水戸へ至る街道である。この道に沿って東山の家並が続く。

家並で最初に目につくのは，右手に見える茅葺曲屋の出村武雄氏宅（調査番号⑬）である。昔は宿屋をしていた家で，低い二階があり，茅は多層葺になっている。出村氏宅の向かいには，直屋の稲葉治兵衛氏宅（調査番号⑭）がある。稲葉氏宅の屋根は茅葺だったが，現在はその上を鉄板で覆っている。稲葉氏宅の先で，道はまた二つに分かれる。右手の道を下っていくと，渡辺政雄氏宅（調査番号⑮），石井輝雄氏宅と，茅葺曲屋が二軒並んでいる。二軒とも平面構成はよく似ているが，渡辺氏宅が二階をもつのに対し，石井氏宅は平屋建てである。本道にもどって東へ歩いていくと，左手に茅葺の直屋が二軒並び，右手にも茅葺の家が二軒並んだ昔の景観がよく残っている所がある。左手の二軒は低い二階を持ち，正面が甲造になっている。そのうちの東側の家は横山邦氏宅（調査番号⑯）で，一階正面は土庇になっている。一方，右手の西側の家は，正面が甲造であるが，二階に相当する部分は壁になっている。東側の家は平屋建てである。さらに進んでいくと左手に，前に突出した茅葺の曲屋がある。その隣りには，屋根は葺き替わっているが，もとは茅葺の曲屋・小池茂一氏宅（調査番号⑰）がある。小池氏宅の先にも，左右に茅葺曲屋の家がある。その先は家もまばらになり，茅葺の曲屋を最後として集落はとぎれる。

**民家の特徴**

東山の民家の特徴の一つは，曲屋形式である。茨城県では県北地方でも曲屋が見られるが，それは東北系のものであり，土間が突出して曲屋を形成する。それに対して，東山の曲屋はザシキの一部分が突出し，別系統であることがわかる。ザシキが突出して曲屋になる形式は，埼玉県から東京都にかけての武蔵地方にも見られ，東山の曲屋もその系統に属するといえる。

東山の曲屋の多くは家の裏側へ突き出しているが，正面に突き出たものもあり，一定していない。道路の南側にある曲屋は，今はないものも含め，すべて裏側へ突き出している。これは南の眺望のよい方にザシキをもってくるためであろう。また棟は，曲り部分の棟が主棟より一段と低くなったものと，主棟と曲り部分の棟とが同じ高さのものとの二種類がある。

第二の特徴は，甲造の屋根である。昔，宿屋をしていた家では，客を多く泊められるように二階建にすることが多かった。茅葺寄棟の家に二階を設ける時には，正面平側を切り取って，ここから採光する。その際，隅の部分が甲のように残るのである。

第三の特徴は，一階表側を土庇にすることである。渡辺氏宅や横山氏宅などでは，現在も土庇にしている。出村氏宅ように現在は内側に取り込まれている家でも，似前は土庇であった。

以上のような特徴は，東山の民家がすべて持っているものではないが，東山の民家の一般的な姿を示しているといえよう。

参　考　文　献

「関東地方の民家」山本勝巳・川島宙次・小林昌人著

## 2—4　上大島

**歴　史**

上大島は筑波山の西麓に位置し，北条から真壁に至る旧道に沿ってできた農業中心の集落である。また上大島は筑波山の西登山口であり，ここから，国松，沼田を経て神社に向かう登山路は，大正時代まで賑っていた。ところが，筑波鉄道や自動車新道が開通すると，登山客はこの道を通らなくなり，しだいにさびれていってしまった。

土地の人の話によれば，上大島は，天正年間に柿岡の浪人が住みついたのが始まりということである。天保頃の戸数は 96 戸であり，明治以後増加して行き，現在は 200戸余りある。

**町並の外観**

道路際には長屋門または薬医門を構え，主屋は南向きに建てる。直屋がほとんどであるが，曲屋も1棟だけある。屋根は瓦葺が多いが，昔は茅葺が主流を占めていた。軒は，正面一方，または正面・側面の二方をせがい造りにして体裁を整える。

次に，西から東へ向かって上大島の町並を順を追って説明しよう。上大島駅から北条の方へしばらく歩いてくると，左右に道に沿って蔵と長屋門，その奥に南向きの主屋が建つ一画がある。左は原隼氏宅（調査番号⑱）で，右は原孝一氏宅（調査番号⑲）である。両家とも極めて似かよった構成をしている点で興味深い。原隼氏宅より少し先には，二階建塗籠造の長屋門がある。片岡早苗氏宅（調査番号⑳）で，奥にはもと曲屋の主屋がある。しばらく歩くと，右手に谷口忠雄氏宅（調査番号㉑）がある。谷口氏宅は，道路沿いに店蔵・薬医門・蔵と並び，店蔵の奥に主屋を建てている。この構成は神郡の桜井義広氏宅などに似ている。この店蔵の二階は正面に面して窓を設けない。1階は左右に戸袋を設け，間に格子戸を立てる。谷口氏宅の隣りには，「とらや」という屋号で，もと宿屋をしていた鈴木欣一氏宅がある。この建物は寄

棟瓦葺二階建で，二階の塗籠めの戸袋に屋号が浮き彫りされている。鈴木氏宅の向かい側には，薬医門としっくい塀の矢口志郎氏宅がある。

以上の所までは町並としてまとまりがあり，比較的よく残っている。さらに東にも薬医門，長屋門，店蔵などが点在する。また1棟だけ残っている曲屋も，この先にある。この家は片岡氏宅をまねて作ったものだそうで，曲り部分は土間になっている。

**町並の特徴**

上大島の町並は，農村的要素に宿場的要素が加味されるという特徴を持っている。その点では，神郡と共通性がある。農村的要素は長屋門・主屋に見られる。長屋門を納屋に使うこと，主屋をせがい造にすること，茅葺の場合に多層葺にすることなどは，茨城県の農家では一般的に行なわれていることである。宿場的要素というのは，宿屋があったこと，店蔵を設けること，長屋門を店または隠居屋として使用することなどにみられる。

薬医門・長屋門はそれぞれ4棟ずつあり，一集落内にしてはいささか多い棟数である。薬医門・長屋門を建てることは，江戸時代には名主・組頭層に特に許された特権であった。それがこのように多いということは，農業生産力の高さ，取締りの緩さによるものと思われる。その点，生産力が低く，取締りが厳しかった旧水戸藩領とは異なっている。この地方の農業生産力の高さは，身分的束縛から解放された明治維新後にこれらを建てる原動力となった。

この上大島の曲屋は，曲り部分が土間になっている。これは県北地方の曲屋と同様であり，東山の曲屋と異なっている点で興味深い。上大島と東山は，位置的には近いのに，別系統である。「2－3　東山」で述べたように，東山の曲屋とは武蔵地方の曲屋と同系統である。

この二者を結ぶ中間点はどこなのだろうか。

それとも偶然そうなったのだろうか。これについては，後の調査研究に譲る。

参　考　文　献

「茨城県の民家」茨城県教育委員会

## 3　民家の個別説明

### 3－1　宮本昇一氏宅（宮本清兵衛商店）

**歴　　史**

代々当主は宮本清兵衛を名のり，屋号は宮清（みやせい）である。明治以前から醤油醸造業をしている。戦前まで20町歩以上の農地を所有していたが，小作料は金納とし，醤油醸造用の小麦と大豆は，東京深川の米穀市場から買って仕込んだという。

明治初めの廃仏毀釈の頃から，八坂神社の神主との係りから神葬祭に変わった。北条では，親戚の市村家のほか数軒が神葬祭だという。明治以前は全宗寺（真言宗）の檀家であり，今でも宮本清兵衛銘の墓碑が並んで残っている。明治以降，商品流通の波にのって成長した地主層の一人として活躍した。二代前の当主が代表の一人となって筑波スレート会社を創業した。現在の主屋がスレート葺なのはその記念である。また醤油の他に明治末から大正にかけての10年間ほどは，郵便局をやっていたこともある。

敷地については中町仲町（なかまちなかちょう）の町内の戸籍である「町内組織定簿明治12年」があり，宮本家は二屋敷分をまとめて所有していることがわかる。また，北条地区は地形が南下り・東下りだから，間口約七間半ごとの短冊形の一敷地の東側に専用の側溝がつくのが一般であるが，宮本家では敷地の中央に溝があり，二屋敷分の土地を所有していることを物語っている。溝が道路側から裏堀まで敷地を短冊形に区画されている様子が地図の上からも観察される。

**配　　置**

道路に面して店蔵と門と倉庫が並んでいる。それぞれの建物の間は築地塀で結ばれる。門は天保の頃の新町の火災が，ここで鎮火した記念となるもので，正面左側の冠木が，黒く焦げた跡を残している。この跡は，縁起がいいので，門はその後造り替えていない。倉庫の内部は，「炭部屋」と「味噌部屋」に支切られている。倉庫の後ろに一列に「倉庫」・「新倉（しんくら）」（ぶんこぐら）・「穀倉」・「仕込倉」が並び，「仕込倉」の横には通路を隔てて「広敷（ひろしき）」という親方の居所があった。店蔵の後ろは主屋で，主屋と店蔵は一体化された機能をもつ。主屋には「はなれ」が接続する。敷地の中に倉・庭・主屋及び店が整然と並んでいて，それぞれにまとまりある空間となっている。

**店　　蔵**

内部は，L字型の土間と畳敷とに分けられている。入口両脇の戸袋内には土戸が入る。夜は格子戸のみで，戸閉まりは半間下がった所の揚戸によって行なった。前半間通りの土間空間は，完全な室内空間とはいい難い，半公共的な空間となっている。なお店先を広く見せるため梁は6間通しの成の高い梁を一本用いてある。揚戸は1間毎に方立を立てて下に降ろすようになっており，上下二枚の割合は4：6で下の戸の方が大きく，下の戸の1つにはくぐりの障子と板戸が立付く。この店蔵に使われている建築材料は畳敷の柱・框などは欅であるが，土間部分の柱などは，松というように使い分けられている。奥の主屋へは，土間と畳敷の両方から出入りできる。主屋との境の建具は三重で，障子・板戸・土戸となっている。天井は，成が550mmの梁と290mmの小梁と250mm厚の天井板（二階床板）による構成である。これが@900mmと@1800mmによる格子状を形成している。

二階は，家財等の収納スペースとして使われた。また店には「元祿十二年三月造之」銘の金庫に使っていた箱や，大正9年に米50俵で買った登録器（レジスター）があり，長い間の商店の歴史の証明である。

**主　屋**

店蔵と主屋は共に当主から五代前の清兵衛の妻キナの設計によると伝えられ，昭和26年調査の家屋課税台帳によれば，弘化4年（1847）の建築となっている。それを裏付ける資料は今回は不足であるが，「ひろま」に作り付けの仏壇があることは，明治の初めに神葬祭に移る以前の建物であろうと推測される。店蔵と主屋は土間を挟んで機能的に結ばれている。現在の台所は昭和44年の改造で，その前は店蔵と主屋を挟む土間がL字形にまわっていた。かまどのある"かって"の空間は土間を隔てて主屋から突き出した位置にくる。土間は店蔵と仕込蔵とを往来するために，かまどがあるとじゃまになったのである。ひろま（あがりはな）は十二畳を八畳と四畳の二間に分けた形で，仕切りの建具は格子戸，鴨居は指鴨居で，両端とも指鴨居で受ける。四畳には長火鉢が置かれてあって，帳場として使われていた。現在では八畳は応接間として，いたのまは居間として使われ，四畳はその合の間的空間となっている。いたのまには造り付けの戸棚があり，婦人の設計への主張の表れであろう。主人の話では今の使い勝手からすれば，無用の長物であるらしい。奥二間の天井は高く，指鴨居の上には竹の節欄間がある。以前には年一度天井も拭く習慣があり，その時には鴨居と鴨居に梯子を掛け渡してその上に乗って天井を拭いたものだという。即ち身長の二倍強の高さである。日当りの悪い陰気さを柔げる為の天井高であろう。

主屋平面は，全体として四間取を基本とし，店蔵と接する湿気の多い土間側に納戸空間を配したものといえる。方位からみて，これ以上間取りを増やすと陰湿な雰囲気となり，神郡の桜井義広氏宅・桜井武氏宅のような六ツ間へとの拡張はむりであろう。従って"はなれ"として廊下を伸ばして主屋への日当りを考慮した拡張となる。

平面規模において，あるいは建築のボリュームからみて，特に明治期に活躍する巨大地主あるいは20町以下の中小地主の勢力を物語る指標となる建築である。

主屋について付記しておく点は，屋根がスレート葺であること。これは二代前の清兵衛が筑波スレート会社を興したうちの一人で，日華事変（1912年）の頃に瓦葺をスレートに葺き替えたものである。

## 3－2　桜井義広氏宅

**歴　史**

屋号を「さちえもん」といい，たばこの卸と呉服商をしていた。門を間に，たばこの卸の店蔵と，呉服店の店蔵が並ぶ。たばこ卸は，昭和6年に国の専売規制の為にやめた。その後は，増改築をして，4年前まで隠居所として使用していた。呉服店の方は，主に絹の布地を扱っていて，現在は，雑貨類も商っている。主屋は呉服店蔵の後に続いている。主屋は「いま」似外は，大正14年4月に改築した。屋根も瓦であったのを，銅板葺に改めた。関東大震災の恐しさの為の配慮である。主屋の建立年代資料として「大正十四年四月二十四日上棟式，本家改築見舞覚」が保存されている。主屋の室内変更は以後ほとんどない。

**配　置**

道路に面して土蔵みせ，門・土蔵みせとあたかも筑波山の男体山・女体山の如くに並び，呉服店の方の店蔵に棟を垂直にして主屋が付く。門を入ると正面には米蔵がある。米蔵の後ろには軒を接して味噌蔵が建っていたが，昨年解体された。さらに，後ろには物置と木小屋が並ぶ。敷地は現在空地になっている南側の土地までで，以前には，ここにも店蔵・蔵が並び非常に商売盛んな時期もあったという。

各建物の建築年代については，昭和26年に作成された固定資産家屋課税台帳副本によれば，店蔵二棟・米蔵・味噌蔵が嘉永5年（1852）の建築となっているが，裏づける資料は不明であった。

**店　蔵**

たばこ卸の店蔵と呉服店の店蔵とを比較すると，意匠的にみても同一年代とは，いい難い点が幾つかある。

(1)　まず棟の造作をみると，たばこ卸の店蔵の棟瓦は雁振瓦・輸違い瓦による構成であるが，呉服店蔵は熨斗瓦と雁振瓦の低い棟であり，鬼瓦も小さい。

(2)　屋根の切妻の端に丸瓦がのるが，たばこ卸の店蔵では二列，呉服店蔵では一列。

(3)　軒が，たばこ卸の店蔵は出桁の形が見えるが，呉服店蔵は鉢巻になっている。出桁的意匠は米蔵にもある。

(4)　二階の窓は，たばこ卸の店蔵は大坂戸が付いているが，呉服店蔵にはない。米蔵にも大坂戸がある。

(5)　一階の土袋の石材の大きさが異なる。

(6)　内部について，たばこ卸の店蔵には揚戸もあり，階段も箱階段であり，天井は大引天井であるが，呉服店蔵には揚戸も箱階段もなく，天井も大引天井ではない。構造的にも稚拙である。

等々，意匠の面からは，たばこ卸の店蔵の方が優れているが，年代的には呉服店蔵の方が古く，至急な建設で意匠的な面はこの次だったと思われる。これはまた明治35年に建てられたとする門の形式とたばこ卸の店蔵が意匠的に似ている点から，この間に建てられたとは考えられない。

**主　屋**

寄棟銅板葺。大正14年改築。主屋は南向きで，南庭を広くとるのは農家的要素である。呉服店蔵と軒を接し，

入口の土間部分は店蔵の壁と主屋軒とに囲まれた空間となっている。土間に天井が張られていないのは旧い要素，入口が大戸でなくガラス戸なのは新しい要素で，暗い土間空間へ明るさが増し始めている。部屋は六つ間の構成であるが，整った四つ間に更に二間が拡張されたような形態である。即ち，入口土間側より大黒柱の筋を境にして「いま」（８畳）と「ちゃのま」（６畳）次に「なかのま」（８畳）と「へや」（８畳）そして「おくざしき」（10畳）と長四畳と並ぶ。その周囲に３尺幅の縁側がまわる。「おくざしき」には床・棚・書院がつく。「いま」「ちゃのま」「へや」は縁無しの畳が四居敷，「なかのま」「おくざしき」は縁付が回し敷とされ，日常生活の空間と接客空間の畳が敷き分けられている。天井は土間寄りの二間「いま」「ちゃのま」の部分が根太天井になっている。現在この上を物置などとして使ってはいないが，茅葺の家ならば茅を蓄えておいたり，あるいは長持ちなどを置いたりする辻子である。使用する時は土間から梯子をかける。軒は“せがい造”になっていて，一間毎の出桁の上に２尺幅の小天井が張られ，その上に化粧垂木が並ぶ。また縁側には欄間が一間おきに入る。格子と引違いの障子による構成。土台，縁側框，指鴨居，桁，いずれも成が高く水平線が強調される意匠となっている。

### ３－３　稲葉治兵衛氏宅

**歴　　史**

屋号を「紙屋」というが，江戸末以来，紙を商っていたためであろう。店には，紙の他に，味噌・醤油も置いてあった。農作物は，通いの小作に任せてあった。当主が筑波神社の神主を勤めていた為もあって，現在は，商売はしていない。

**主　　屋**

＜構　　造＞

現在は，屋根は瓦型のトタン板葺になっているが，トタン板の下は茅葺のままである。茅葺は新旧の茅を層にして美しく葺いてあったもので，稲葉家の場合は，五層葺きになっていた。茅といっても湖茅，山茅，それに稲藁・麦藁なども用いられたのである。正面は現在サッシやトタン張の壁に変わってしまっているが，出桁の軒，二階の手すり，それに入口の庇及び特送りは，当初の姿を彷彿させる。庇は土間部分入口１間の根太天井の根太（成 260 mm ）が桁より伸びて，庇を支える。庇との接点の根太下端には繰形がつき，庇先の軒桁は繰形の付いた持送りによって支えられる。こうした意匠は，“はたごや”の庇によく見られるが，この家では旅館はしたことがないという。

＜平面構成＞

明治 29 年秋分節の家相図によると，現在サッシが入って改造されている部分は，土間で６畳部分が張り出すようになっていて，ここを「おみせ」と呼んでいた。「おみせ」への出入は，この道路側に張り出した土間から行なわれ，家への入口は，道路から１間余下がった方の出入口であった。柱は全体的に少なく開放感がある。土間部分の梁は重ね梁になっている。天井は土間半分と１０畳間とおかってが竹すのこになっている。おくざしきと６畳の部屋が接客空間となり，６畳とおみせ，更に土間の道路側１間の上に２階がのる。

### ３－４　原隼氏 宅

**歴　　史**

この家の主屋は，現在瓦葺であるが，以前は茅葺だった。茅葺から瓦葺に変えたのは，四代前の隼助さんの代の時で，それは130 年前頃であろう。茅葺の主屋がいつ建てられたかは定かではないが，少なくとも150 年は経っていると見てまちがいはないであろう。

原家は代々農家であり，隼助さんの代には庄屋となり，畑だけでも２０ 数町あり，５～10 人の使用人がいたそうである。戦前までは養蚕が主で，大正期が一つのピークであり，茨城県内で一番飼っていたといわれている。その頃使用人は男女１人ずつで，養蚕の忙しい時には，５～10 人を臨時に雇った。また当時は桑を１貫目２～３銭で買っており，上蔟期には桑を運んで来る人が門前列をなしたといわれる。

**配　　置**

現在道路に沿って土蔵・長屋門が立ち，その奥に南を向いて瓦葺の主屋がある。土蔵は慶応から明治初め頃にかけて建てられたもので，書類や着物などを入れ，文庫蔵として使われていた。土蔵の西隣りには，二階建の隠居所が大正10 年頃まであった。また，主屋と庭をはさんだ位置には，明治 35 年から昭和１８ 年にかけて「さんしつ」と呼ばれた三階建の養蚕小屋があった。東向きに建っている小屋は「じがら」と呼ばれるもみすりの作業場であり，足で踏んで，もみすりを行なっていた。この小屋は以前は主屋の裏にあり，現在小屋の建っている場所には米倉があった。

**長 屋 門**

長屋門の建築年代は明らかではない。明治 20 年頃，三代前の隼十郎夫妻は，右手部分に隠居して金貸しを始めたそうであるから，建物はそれよりもさかのぼると思われる。その時に道路側の壁を取り払い，緑をつけ，用心のために谷口氏宅のような厚い格子を入れた。その後大正末からしばらくの間，五十銀行出張所がこの長屋門を借りており，その際，格子を取りはずした。現在，右手部分はおばあさんが隠居所として用いているが，左手部分は使われていない。長屋門を隠居所として使用する例は他にも見られ，興味深い。

**主　屋**

＜年　代＞

歴史の項で述べたように，少なくとも150 年は経っている。

＜構造形式＞

桁行 10 間，梁間5間で，土間部分の背後に1間の下屋がつき，西側に「うまや」が付属する。屋根は現在瓦葺だが，もとは茅葺きであった。寄棟で，入口前面と側面は半せがい造となっている。小屋組は和小屋。

＜平面構成＞

整形六つ間取で，畳部分の三方に「とおれん」と呼ばれる3尺の廊下がつく。北側の「とおれん」は今はなく，南側の「とおれん」は3尺から1間に広げられ，畳敷になっている。屋根を瓦に葺き替えたときに縁を広げたということだが，養蚕のための使いやすさから広げたのではないだろうか。

土間に入って左手にある現在応接室になっているところは，元は「おとこべや」と呼ばれる男の使用人（若い衆）のための部屋であった。部屋は南側に8畳の「ひろま」，6畳の「なかざしき」，8畳の「おくざしき」の三室がある。「おくざしき」には床の間，棚がつく。北側には，8畳の「ちゃのま」，3畳の「こべや」（もと女中室），6畳の「へや」の三室が並ぶ。このうち「へや」は「とおれん」からしか出入りできなかったものを，「おくざしき」と「こべや」からも出入りできるように後世改造している。仏壇は「なかざしき」の方の南側に向いているが，もとは「ちゃのま」の方を向いていた。これは仏壇を明るくするためと，「おかっての方に向いていると女の人が忙しくなる。」ということで，おばあさんの代に変えたそうである。

＜住まい方＞

**寝間**　「なかざしき」は当主夫婦が，「へや」は長男夫婦が，「ちゃのま」・「おくざしき」は子供たちが寝所として使った。親が穏居したり，亡くなったあとは長男夫婦が「なかざしき」を使うようになる。

**食事**　家族は「ちゃのま」で，女中・若い衆は板の間で食事をとった。

**結婚式**　結婚式は，「おくざしき」・「なかざしき」を使って行なわれ，「へや」は「祝こざ」と呼んで，お嫁さん・お婿さん・仲人の控室として使われた。

**養蚕**　「ひろま」，「なかざしき」，「おくざしき」の三室は，一時期いろりが切られ，養蚕のために使われたこともあった。この時期は，温暖育で飼われていたと思われる。温暖育は屋根裏だけでなく，居室も飼育室として使う。部屋の広さは，蚕架を有効に配置するためには，8畳より 10 畳の方が都合がよい[1]ので，南側の3尺の「とおれん」を1間に拡げたのであろう。

1）「民家は生きてきた」伊藤鄭爾著

なお，この報告書を作成するにあたっては，石井邦彦・吉沢政己両君の献身的な努力に負うところが大きい。

また，収載した図面は調査に参加した諸君全員によって清書されたものである。

**研究組織**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 研究主査 | 石井　昭 | 東京都立大学工学部教官 | |
| | 一色史彦 | 〃 | |
| 研究協力者 | 石井邦彦 | 〃 | 大学院生 |
| | 吉沢政己 | 〃 | 学部学生 |
| 調査協力者 | 羽生修二 | 〃 | 大学院生 |
| | 星　和彦 | 〃 | 〃 |
| | 南　直行 | 〃 | 〃 |
| | 山田幸正 | 〃 | 〃 |
| | 及川正二 | 〃 | 学部学生 |
| | 満山善之 | 〃 | 〃 |
| | 荒牧澄多 | 〃 | 〃 |
| | 弭間正明 | 〃 | 〃 |
| | 前沢奈緒子 | 〃 | 〃 |

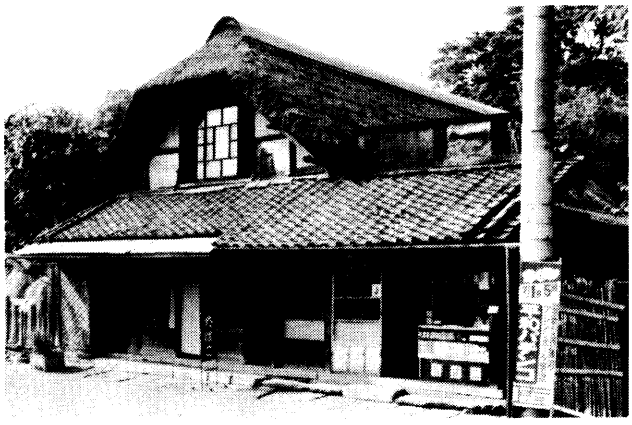


**写真 1）松本金吾氏宅外観**

八坂神社の左隣り，北条中町の東端に位置するこの建物は，屋根の前面が甲造りであるうえに道路の屈曲点にあるためとくに人目を引く。

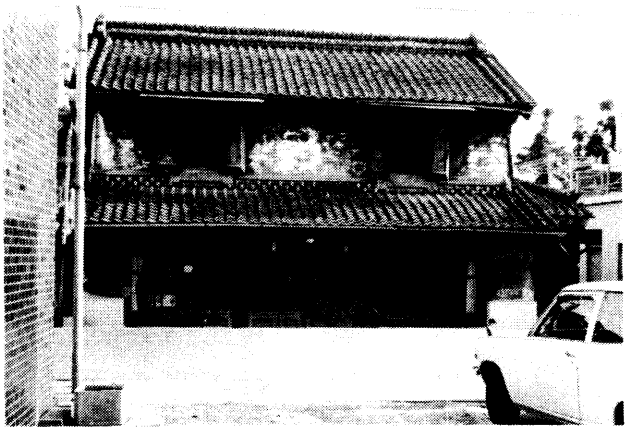


**写真 2）宮本清兵衛商店外観**

この町で創建以来の姿を最も良く伝えている建物である。配慮のない道路舗装によって．出入口に段差がついているなどは伝統破壊の"一助"となっていることに注目したい。

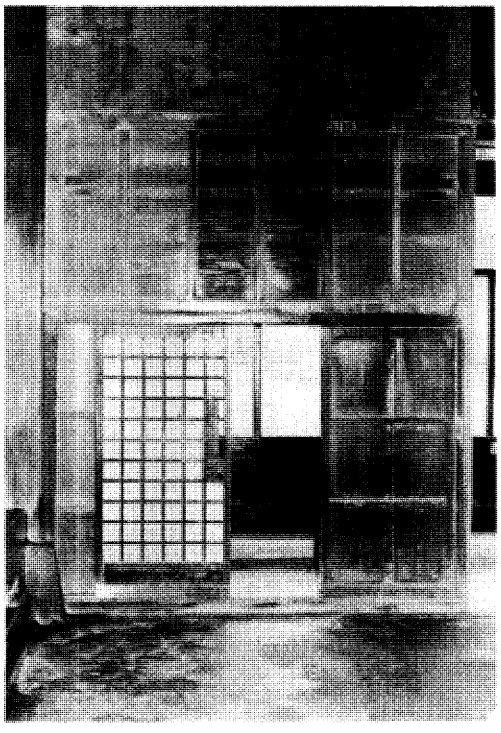


**写真 3）宮本清兵衛商店揚戸**

戸締まりは1間毎に方立を入れて揚戸を下ろす。敷居はみかげ石である。

**写真 4）沢辺ヤス氏宅外観**

道路に対して間口の狭い短冊形の敷地では寄棟が道路と垂直になる例である。

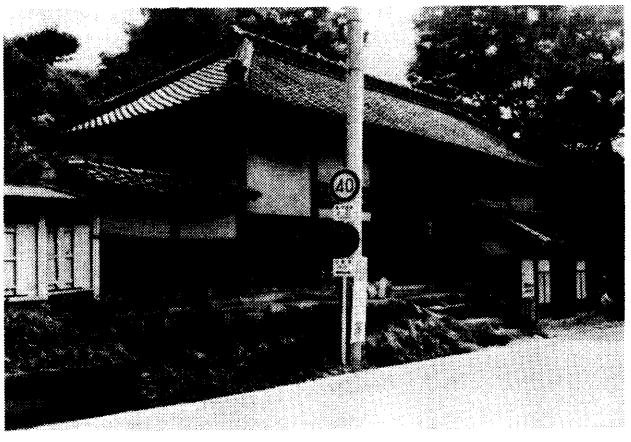


**写真 5）山口好夫氏宅長屋門外観**

最も基本的な長屋門の形態である。右側の一段低い庇部分は当初からのものであろうか。

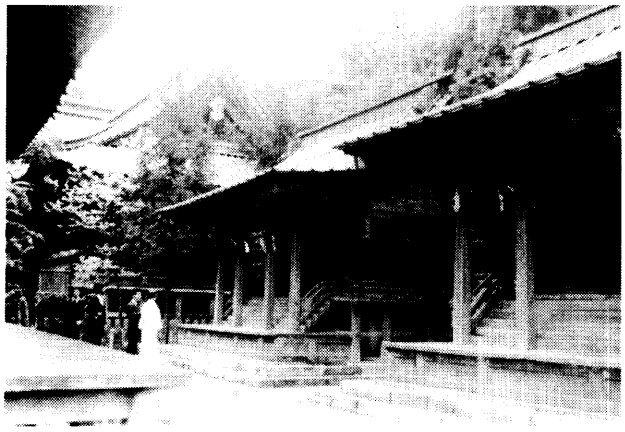


**写真6）　筑波山神社**

手前は徳川家光の寄進に係る，当社の末社日枝・春日の両社である。後方は明治の再建による拝殿。この位置にはもと仏教関係の本堂・三重塔などがあった。明治以前の建築密度を彷彿させる。

**写真7）　稲葉治兵衛氏宅外観**

東山宿の筑波山神社よりに立つ。
屋根はもと茅葺であったが，近年になってトタン葺に改められた。玄関まわりは旧観を留めており，庇を支える成の高い根太及び持送りには，大胆な大工の仕事ぶりが表われている。

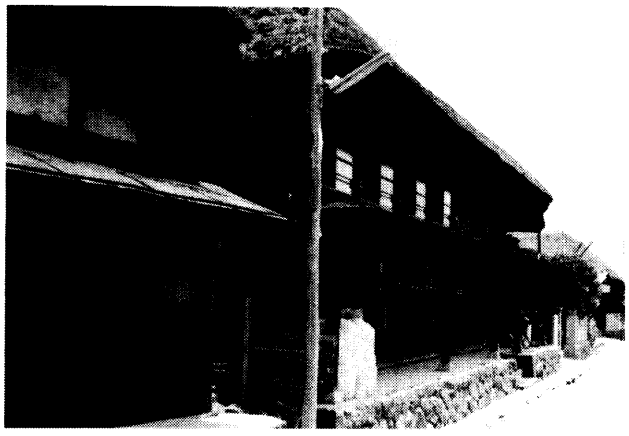


**写真8）　横山邦氏宅外観**

東山に最も多く見られる形態の建物で，東側の軒が幾分葺き下ろしになっており，東風を防ぐ役割をはたしている。敷地が斜面になるので石垣によって整地されているのもこの地区の一般的景観である。

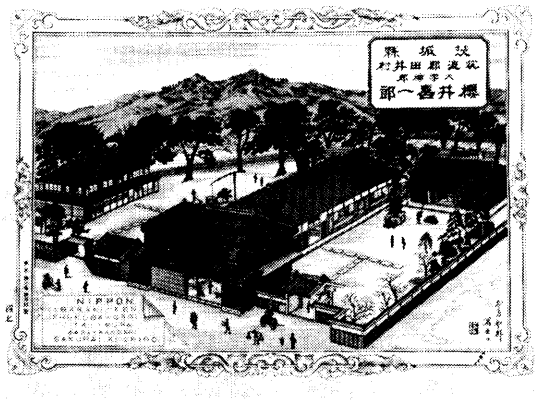



**写真9）　桜井武氏宅鳥瞰図**

明治時代，外国に日本民家を紹介する目的で関東地方から二百数十棟が描かれた中の一つである。当時の建物の状況が克明にわかり貴重な資料の一つである。現状もこの通りに残っている。

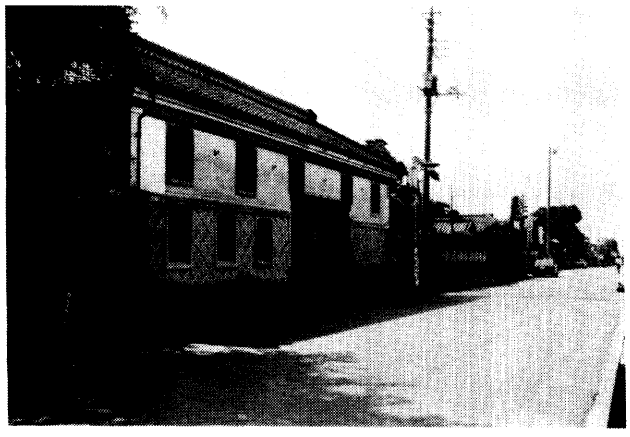


**写真10）　片岡早苗氏宅長屋門外観**

民家を扱った諸本に紹介されてきた門であり，内部機能よりも見せる為の建築として建てられた長屋門の例といえよう。

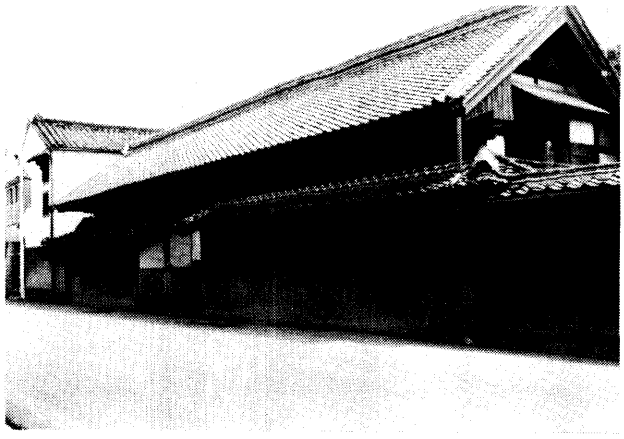
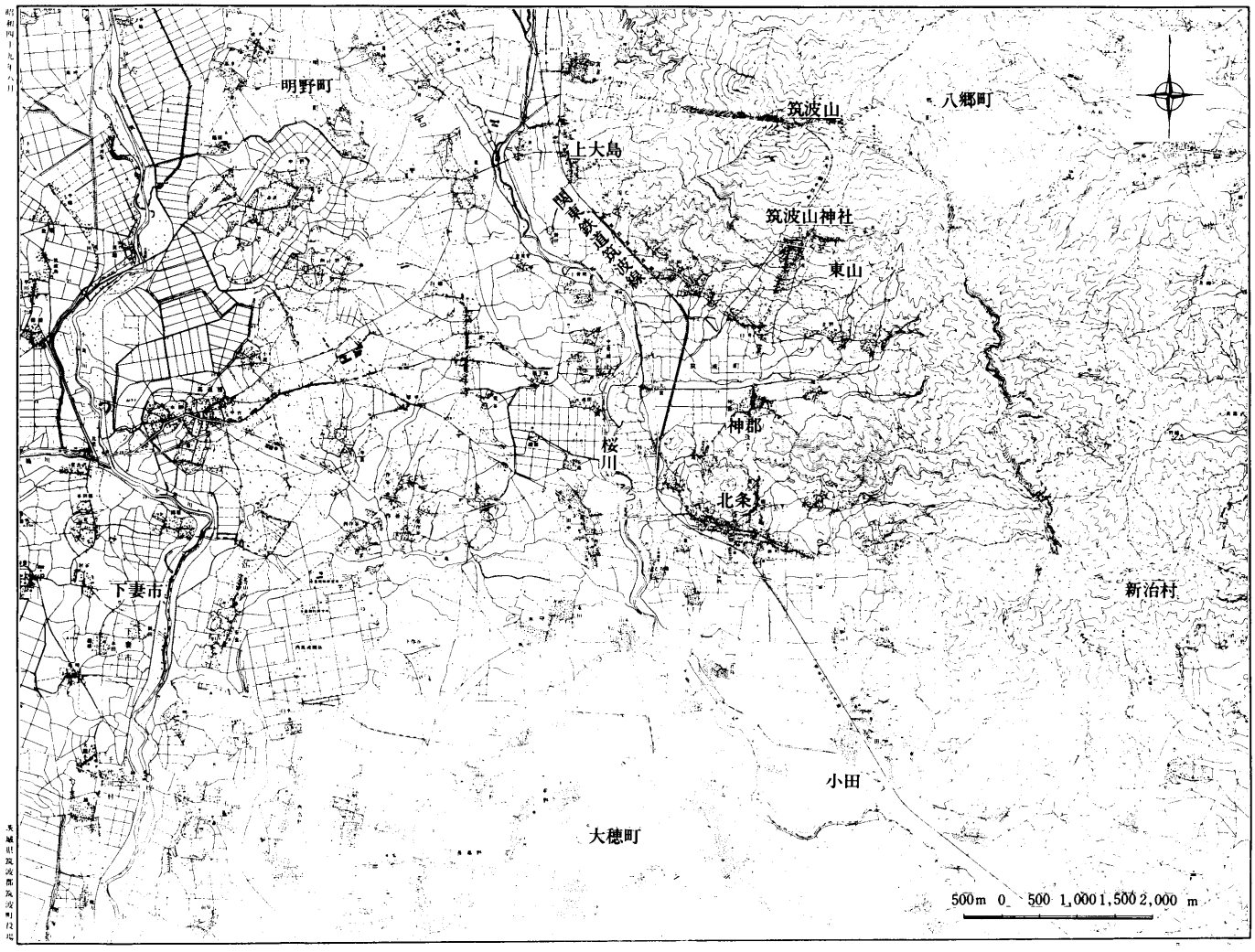


**写真11．原隼氏宅長屋門外観**

商店として，あるいは隠居所として用いられた長屋門で，積極的に利用されてきた門の例で，意匠的には凝っていない。片岡氏宅の隣りに立つ，この長屋門は伝統的な形式を踏襲している。

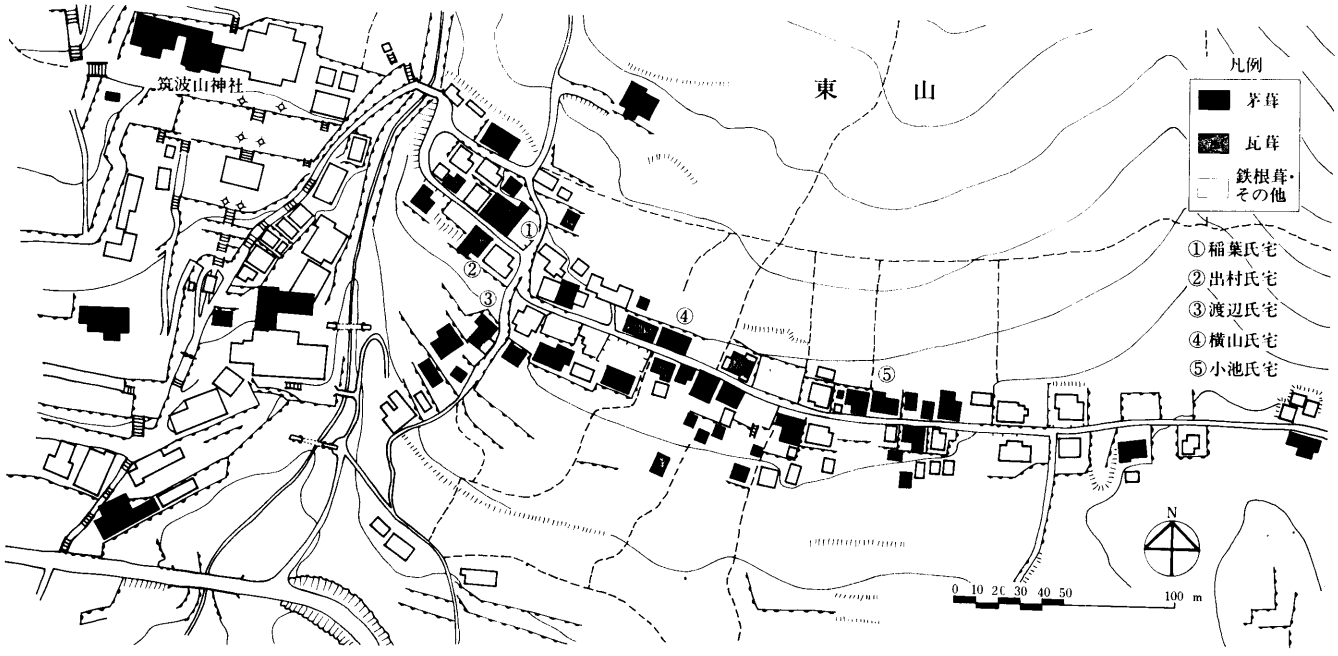



▲筑　波　町　全　図

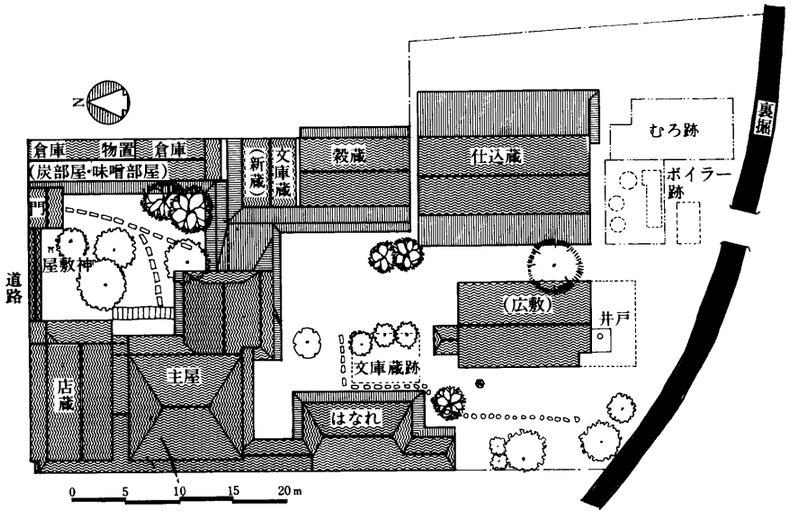
## 調　査　家　屋　一　覧　表

| No. | 氏　　名 | 地区 | 調査対象 | 保存状況及び外観特徴 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 松本金吾 | 北条 | 主屋 | 茅葺で当初の姿をよく残している。 |
| 2 | 宮本昇一 | | 主屋・店蔵 | 外観も店蔵の使われ方も昔のまま。 |
| 3 | 沢辺ヤス | | 主屋 | 棟が道路と垂直。内部変更あり。 |
| 4 | 宮本要 | | 主屋・店蔵 | 店蔵・主屋が棟を並べる。建築密度が大きい。 |
| 5 | 田村積子 | | 主屋 | 二階は年代の異なる二棟となっている。 |
| 6 | 川田廉平 | | 主屋 | 土蔵造りの古材を用いた標準家屋。 |
| 7 | 宮本常次郎 | | 主屋・店蔵 | 店蔵・倉庫が三棟並ぶ酒屋。 |
| 8 | 山口好夫 | | 主屋・長屋門 | 傾斜地で石階による長屋門へのアプローチ。 |
| 9 | 広瀬とし子 | | 主屋 | 昭和2年の建物。外面の細さと内部の太さが対照的。 |
| 10 | 桜井昌之助 | 神郡 | 主屋・長屋門 | 住居・物置を兼ねた長屋門。 |
| 11 | 桜井義広 | | 主屋・店蔵 | 店蔵二棟と門による外観がよく残っている。 |
| 12 | 桜井武 | | 主屋・店蔵 | 店蔵は使用されていないがよく残されている。 |
| 13 | 出村武雄 | 東山 | 主屋 | 宿屋の形態をよく残している。曲屋。 |
| 14 | 稲葉治兵衛 | | 主屋 | 宿屋的雰囲気のある立面。棟の高い茅葺屋根。 |
| 15 | 渡辺政雄 | | 主屋 | 道路側に二階のある茅葺曲屋。 |
| 16 | 横山邦 | | 主屋 | 宿屋を兼ねていたこの地区の標準的な家屋。 |
| 17 | 小池茂一 | | 主屋 | 農家の標準的な家屋。 |
| 18 | 原隼 | 上大島 | 主屋・長屋門 | 店を兼ねる長屋門と三階蔵による立面。 |
| 19 | 原孝一 | | 主屋・長屋門 | 店と物置を兼ねる長屋門と蔵による立面。 |
| 20 | 片岡早苗 | | 主屋・長屋門 | 意匠的にすぐれた長屋門。 |
| 21 | 谷口忠雄 | | 店蔵 | 店と門と蔵による立面。 |

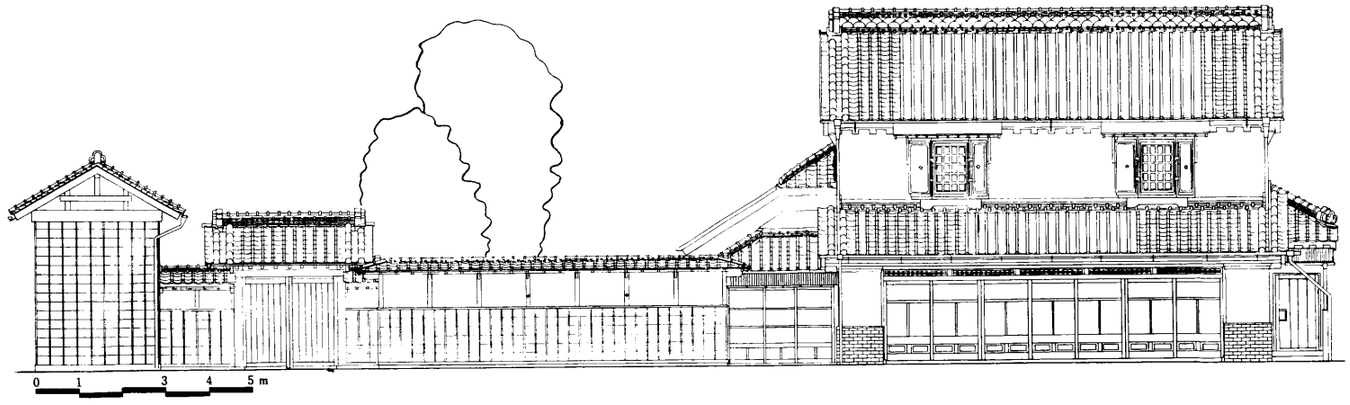
▲東山地区航空写真



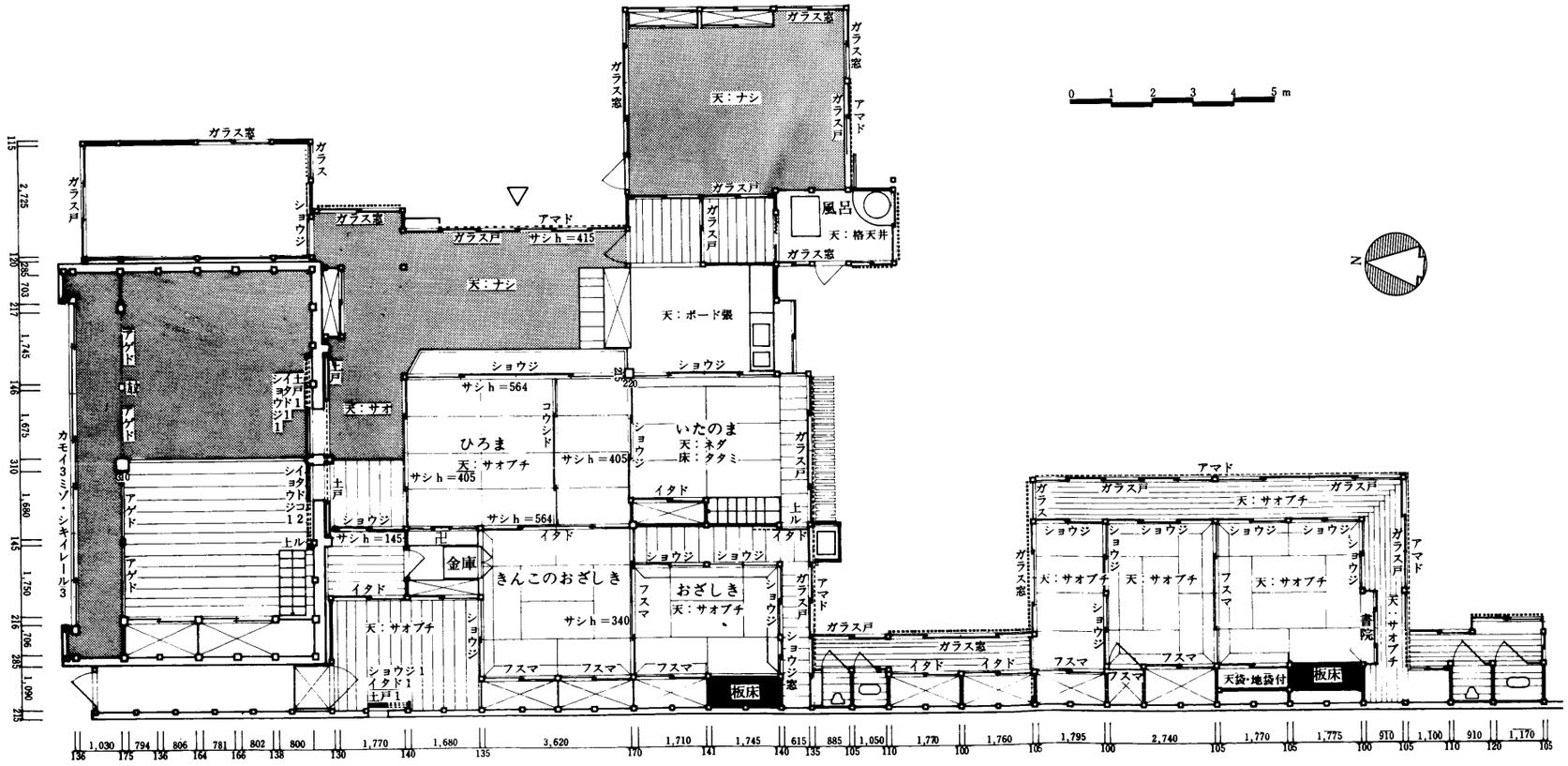

▲東山地区屋根葺材別分布図



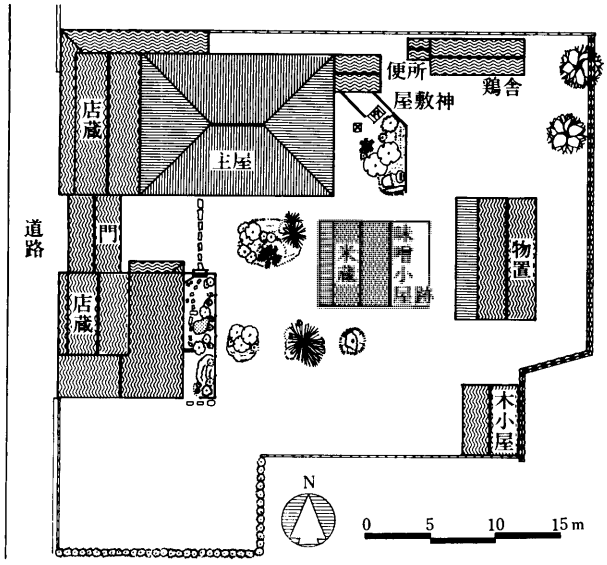

▲図３－１－ａ　宮本昇一氏宅配置図



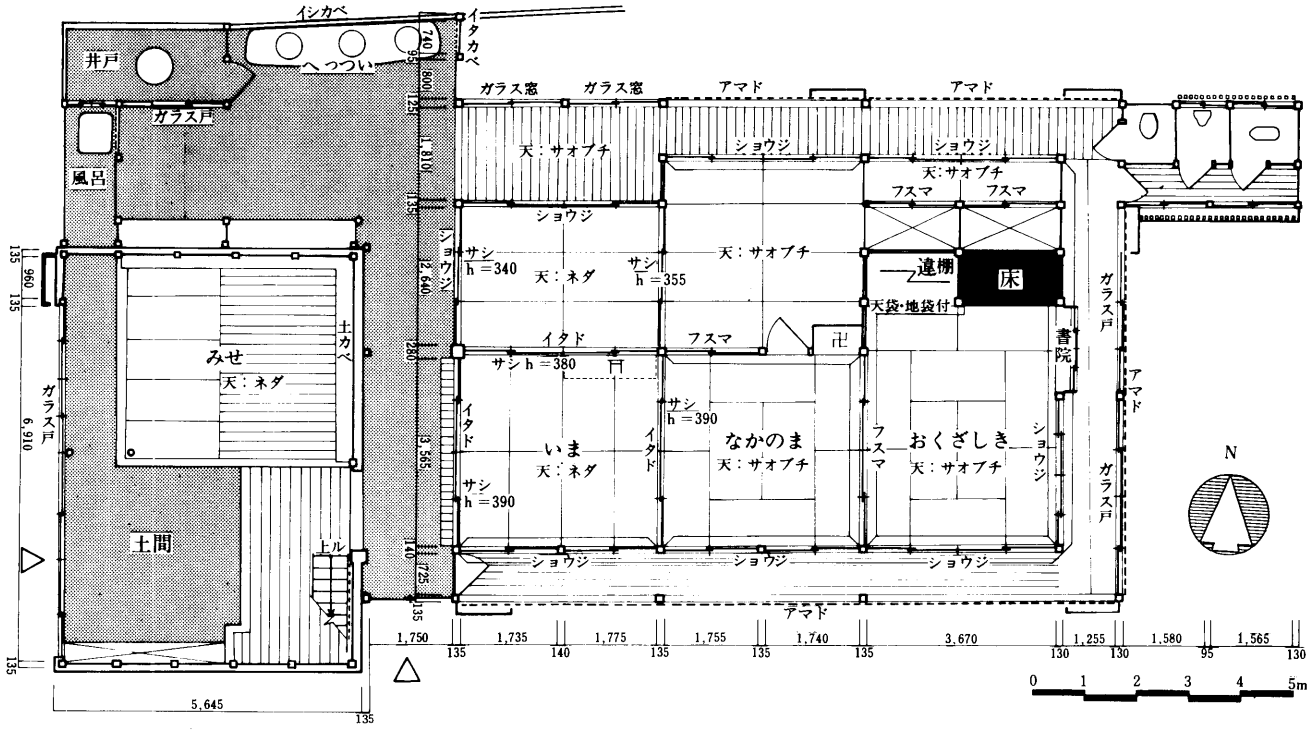

▲図３－１－ｃ　宮本昇一氏宅立面図



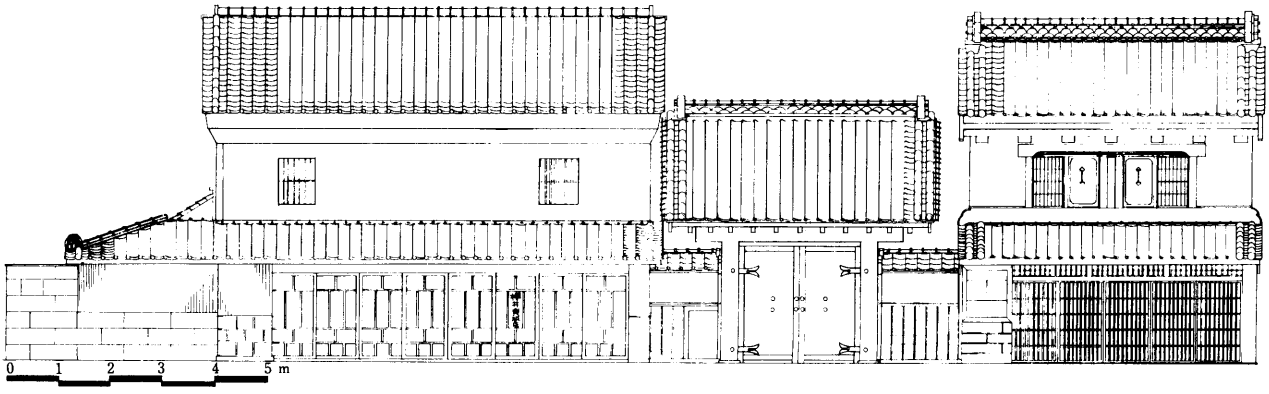

◀図３－１－ｂ　宮本昇一氏宅平面図



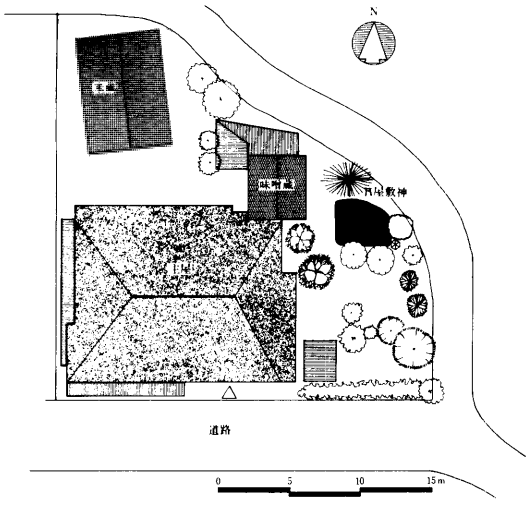

◀ 図3－2－a　桜井義広氏宅配置図



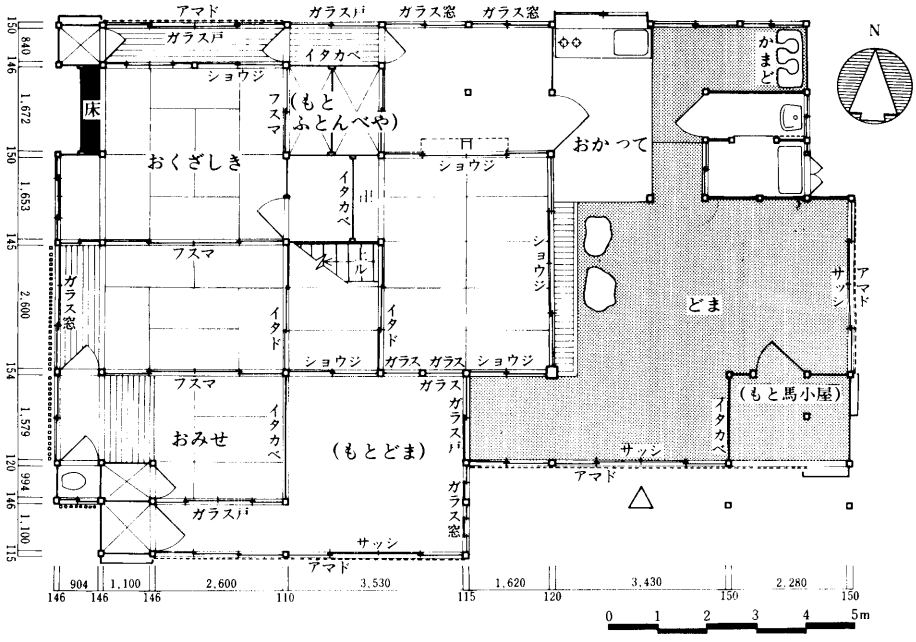

▲ 図3－2－b　桜井義広氏宅平面図



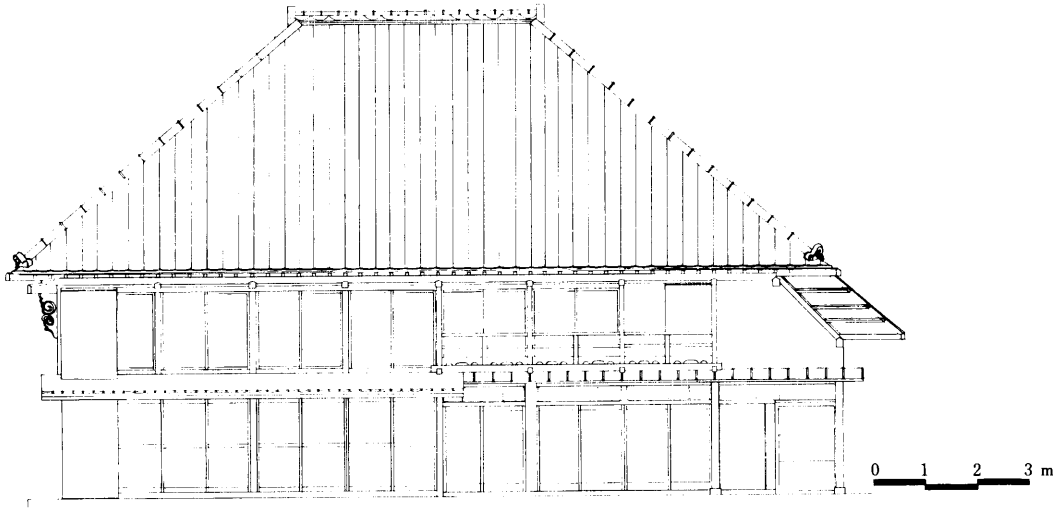

▲ 図3－2－c　桜井義広氏宅立面図



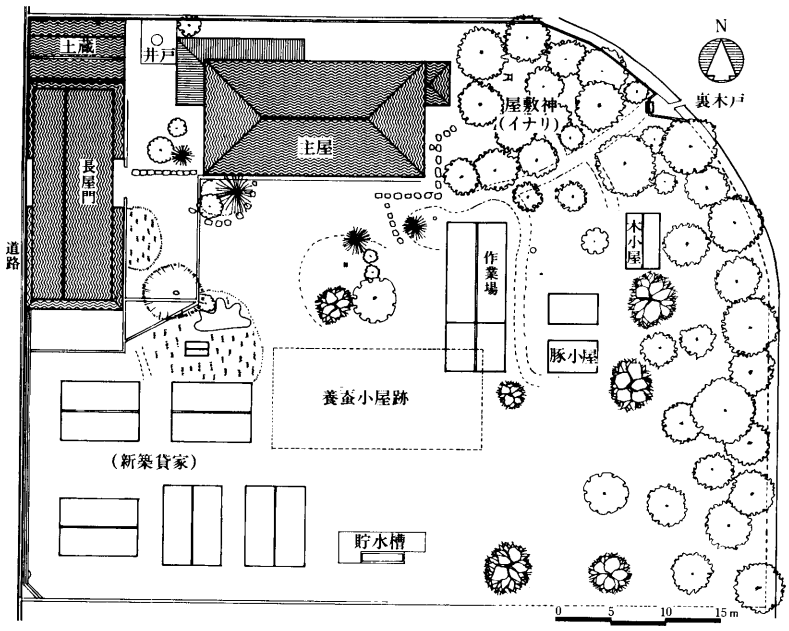

◀ 図3－3－a　稲葉治兵衛氏宅配置図



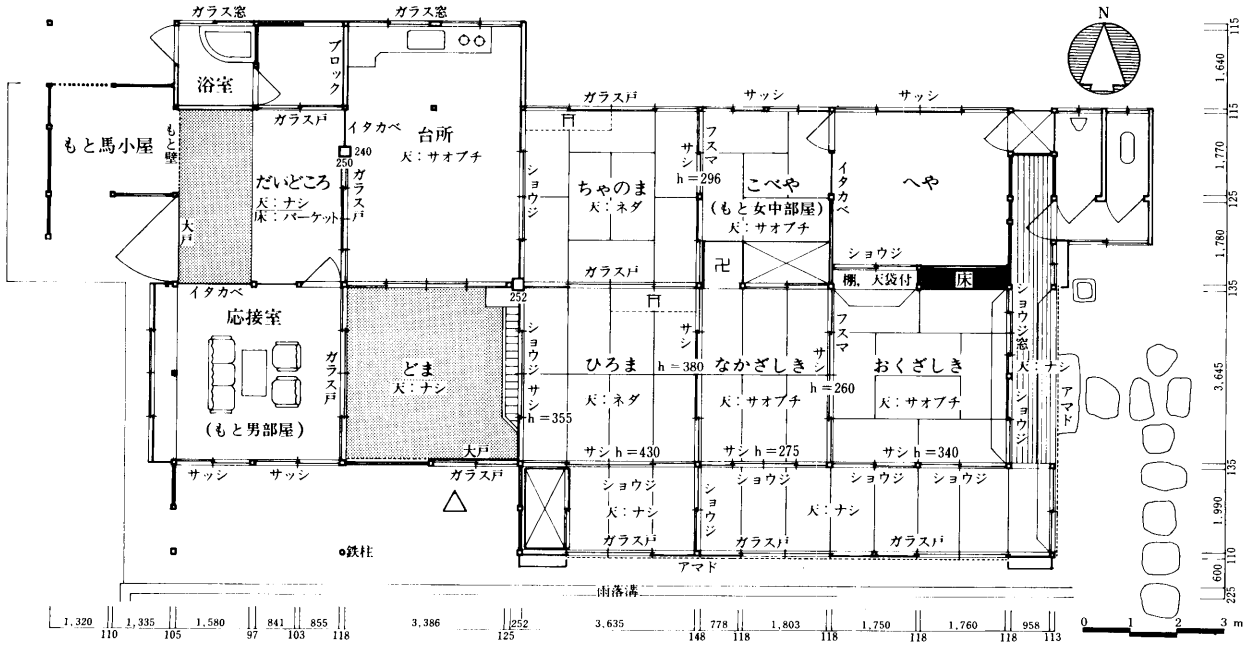

▲ 図3－3－b　稲葉治兵衛氏宅平面図



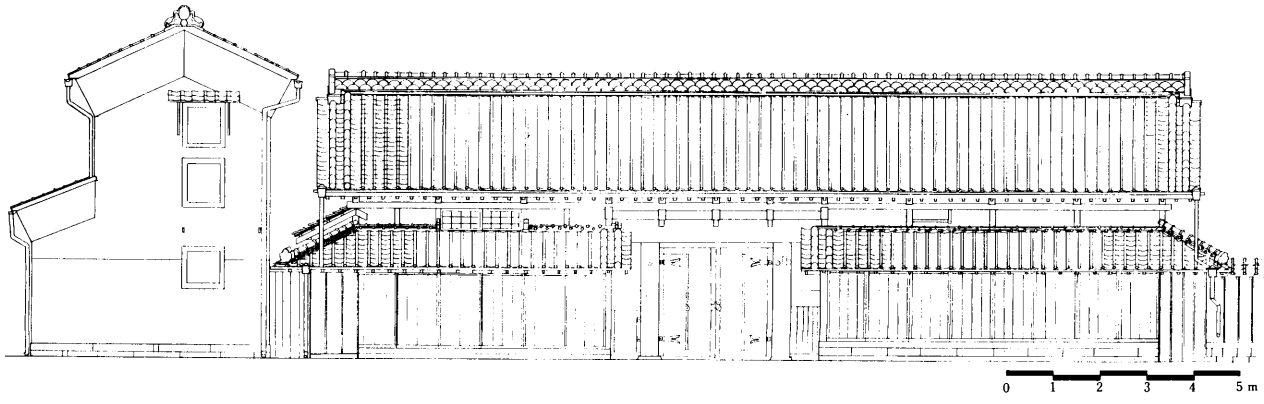

▲ 図3－3－c　稲葉治兵衛氏宅立面図




◀図3－4－a　原隼氏宅配置図




▲図3－4－b　原隼氏宅平面図




▲図3－4－c　原隼氏宅立面図